

カストリア、アギイ・アナルギリ聖堂と アギオス・ニコラオス・トゥ・カスニヅィ聖堂の諸聖人像について

海老原 梨江

本稿は、北ギリシアの湖畔の町カストリアに残るふたつの聖堂を中心に、聖堂装飾における諸聖人像の意義と役割を検証するものである。神の世界の具現という理念のもと、聖堂内部の様々な形象の壁面に図像を配すビザンティンの壁画プログラムは、中期（9世紀半ば～13世紀初頭）に確立し、現在に至るまで踏襲される規範となった¹。そのプログラムとは、図像主題の神学的な位階と建築的な位階が対応するよう、図像選択と配置を行うものである。建築には上部から下部へ、東から西へと二重の軸が設定され、それによって図像が序列された。ドームや内陣の آپシスなど壁面最上部にはキリストや聖母マリアの像、続く比較的高い壁面に一連のキリスト伝場面、最も低い場所に諸聖人が立像・胸像・メダイヨンの形式で表される。キリストやその事績を描く図像は重要度が高く、各聖堂ともほぼ共通した図像と配置を見せるが、一方で、壁面の最下部に並ぶ聖人たちの図像は、選択・配置の両面において千差万別であり、聖堂毎の特色を顕わにする。

プログラムが形成された中期の時代背景を顧みると、国家事業としての聖人暦の編纂、貴族や修道院の勃興に伴う私的聖堂の増加が、多様な聖人像を生み出す誘因となったことが見て取れる。この時期、聖堂建築のみならず写本やイコン等の制作が増加し、聖人像は、様々な媒体に前代よりも盛んに描かれるようになった。聖堂に関しては、壁画装飾の規範の確立・普及と諸聖人像の飛躍的な増量が時代的に連動しており、プログラムにおいて多数の聖人たちの似姿が不可欠な要素となる。

聖堂に描かれる諸聖人像については従来、個別の聖堂研究や内陣・^{ナルテクス} 玄関廊など特定の区画を飾る壁画を扱うもの、聖人のジャンル（神学者、軍人聖者等）に限定した論考において言及されてきた²。先行研究で指摘されたのは、聖人像が、献堂対象や各聖堂の性質・建築各部の機能に合わせ、複数の基準を以て選択・配置された点である。階層的な図像配置の規範に倣いながら、各聖堂は、自らの裁量の余地において個性的なプログラムを実現した。それは特に、比較的自由度が高く、図像候補の豊富な壁面最下層に明瞭に発揮される。この個性とは聖堂の性質や建築各部の機能、あるいは寄進者と特定の聖人との緊密な絆である。2008年ロンドンで開催されたビザンテ

¹ O. Demus, *Byzantine Mosaic Decoration*, New York, 1976 (London, 1948).

² 例えば D. Mouriki, “Οι τοιχογραφίες του παρεκκλησίου της μονής Αγίου Ιωάννου του Θεολόγου στην Πάτμο,” *Δελτίο της Χριστιανικής Αρχαιολογικής Εταιρείας* (=ΔΧΑΕ), ser. 4, vol. 14 (1987-1988), pp. 205-266; N. Guerassimenko, “The Representations of Physician Saints in the Katholikon of Hosios Loukas, Phokis,” in: S. Lamia et al (eds.), *Decorations for the Holy Dead: Visual Embellishment on Tombs and Shrines of Saints*, Turnhout, 2002, pp. 167-175; N. Gkioles, “Το εικονογραφικό πρόγραμμα του νάρθηκα του Οσίου Λουκά,” *Επετηρίς Εταιρείας Βυζαντινών Σπουδών* 53 (2007-2009), pp. 139-160.

イン展カタログにおいて、リズ・ジェームスはこう記す。

各聖堂に描かれる個々の聖人の選択は一見して恣意的な性質を持つが、これは彼らの特性や聖堂の役割がその選択に重要であったことを示す。実に、聖堂は聖人選択による個性化を可能とした。それぞれの寄進者、修道士の種類、聖堂の種類、これらすべてが聖人選択に重要な諸要素であったに違いない³。

本稿は、数千もの候補からどのような基準を以て聖人を選び、彼らを描く聖堂の壁面をどのように決定したのか、具体的な作例の観察をもとに考察を進めていく。アギイ・アナルギリ Agioi Anargyroi 聖堂（以下アナルギリ聖堂）とアギオス・ニコラオス・トゥ・カスニヅィ Agios Nikolaos tou Kastnizi 聖堂（以下ニコラオス聖堂）は、壁面の保存状態が比較的良好な 12 世紀の聖堂で、銘文と肖像から寄進者が知られる。両聖堂とも、聖人像の選択と配置、そして聖人と寄進者との関係の実際的な検証が可能であることから、調査対象として好適と判断した。

聖人崇敬と肖像の由来

聖堂装飾の具体的な検討に入る準備として、聖人信仰とその図像の由来を概観しておく。聖人は信徒の守護者であり、神と人との仲介者である⁴。聖人に対する崇敬と彼らの肖像は、古代ローマ期にその起源が求められよう。一般の人々に対する葬礼儀礼は、時代の変遷とともに対象を各都市の英雄へと転じ、私的なものから公共的な性格を帯びるようになった。キリスト教期に入ると、信仰に殉じた英雄、すなわち殉教者の祭礼へと発展していく。かつて地上に生を送り信仰に献身した聖人は、信徒の手本であり最も身近な宗教的存在となった。墓の周囲に死者の肖像を飾る慣習は殉教者に継承され、殉教者記念堂^{マルティリウム}にはその肖像と事績が描かれた⁵。古代の葬礼では命日と埋葬日が重視されたが、キリスト教徒も地上の死を天国における誕生と見なし、これを祝った。日々祀る殉教者の一覧が各教会で作成され、当初は固有の暦に基づく祭礼を執っていたものが、徐々に他地域の殉教者を自らの一覧に取込む相互交流が行われる。この交流は様々な共同体の関係が強化されるに伴い、より頻繁になった。聖遺物移動や分配、聖人の似姿を表す板絵アイコンも、殉教者信仰の発展を促す。キリスト教迫害期以降の崇敬の対象は、殉教者から主教や修道士へとさらに拡大していく。初期キリスト教期より数百年を経るうちに、聖人の数は数千に達した。

³ L. James, "At Church," in: R. Cormack and M. Vassilaki (eds.), *Byzantium 330-1453*, London, 2008, pp. 198-199. ジェームスは 1994 年、23 の中期ビザンティン聖堂に描かれた聖人像を調査した。すべての聖堂に共通して描かれた聖人が一人もおらず、また多くの聖人が一聖堂のみに表されることから、聖人選択の多様性を指摘する。Eadem, "Monks, Monastic Art and the Middle Byzantine Church," in: M. Mullet and A. Kirby (eds.), *The Theotokos Evergetis and Eleventh-Century Monasticism*, Belfast, 1994, pp. 162-175.

⁴ H. Delehaye, *Les origines du culte des martyrs*, Brussels, 1912; P. Brown, "The Rise and Function of the Holy Man in Late Antiquity," *The Journal of Roman Studies* 61 (1971), pp. 80-101.

⁵ A. Grabar, *Martyrium*, I, II, Paris, 1946 (rep. in. 1972).

各地域の多様な聖人記念日一覧を統一化するため、10世紀、シメオン・メタフラスティス Symeon Metaphrastes が聖人伝の編纂作業に着手し、各聖人伝の章句を日付順に配したメノロギオンを作成した⁶。このメノロギオンは帝国の典礼の基準となる。続く世紀に、聖人像や殉教場面を含む挿絵入り写本（図1）や年間の各日の聖人を複数の板絵に描き並べるカレンダー・アイコン（図2）、中央に聖人像を配し周囲を伝記場面で囲む伝記アイコンも制作された⁷。中期ビザンティン聖堂では、最下部の壁面が一連の諸聖人像に飾られるようになる。12世紀以降は聖人伝場面も聖堂内に表され、時代が下るにつれてその数を増していく⁸。シメオンの聖者暦編纂を皮切りに、聖人を描く図像は質量ともに増加した。初期に大まかに殉教者と認識されていた聖人は、中期以降、主教・軍人聖者・医療聖人・殉教聖人・修道聖人・聖女など明確に分類され、衣装の描分けにより図像上の差異化が行われるとともに、聖堂内に相応の場所を獲得した。カストリアの2聖堂に見られる装飾プログラムは、以上に略述したように、数百年に亘る聖人信仰と図像の伝統を背景とするものである。

カストリアと12世紀のビザンティン美術

アナルギリ聖堂とニコラオス聖堂⁹を擁す小都市カストリアは、古代ローマ以来の軍事街道であるエグナティア街道沿いに位置する要衝であり、貴族や高官の亡命の地ともなった。アナルギリ聖堂は町の北東に建つ三廊式バシリカで、地方貴族テオドロス・リムニオティス Theodoros

⁶ H. Deliyanni-Doris, "Menologion," *Reallexikon zur byzantinischen Kunst* (=RbK) VI, cols. 124-218; Ch. Hogel, *Symeon Metaphrastes: Rewriting and Canonization*, Copenhagen, 2002.

⁷ H. Deliyanni-Doris, "Εικονογραφημένοι κώδικες του Μεταφραστή. Κατάταξη σε ομάδες-Κριτήρια," *Παρουσία* 1 (1982), pp. 277-313; N. P. Ševčenko, *Illustrated Manuscripts of the Metaphrastian Menologion*, Chicago and London, 1990.

⁸ Th. Gouma-Peterson, "Narrative Cycles of Saints' Lives in Byzantine Churches from the Tenth to the Mid-fourteenth Century," *Greek Orthodox Theological Review* 30, 1 (1985), pp. 31-44.

⁹ A. K. Orlandos, "Βυζαντινά μνημεία της Καστοριάς," *Αρχαίον των Βυζαντινών μνημείων της Ελλάδας* 4 (1938), pp. 10-60, 137-146; S. Pelekanides, *Καστοριά, I, Βυζαντινά τοιχογραφία, πίνακες*, Thessaloniki, 1953, pls. 1-62; Idem, "I piu antichi affreschi di Kastoria," *Corsi di cultura sull'arte ravennate e bizantina* 1964, pp. 351-366; Idem, "Kastoria," *RbK* III, cols. 1190-1224; T. Malmquist, *Byzantine 12th Century Frescoes in Kastoria: Agioi Anargyroi and Agios Nikolaos tou Kasnitzi*, Uppsala, 1979; A. W. Epstein, "Middle Byzantine Churches of Kastoria: Dates and Implications," *The Art Bulletin* 62 (1980), pp. 190-207; S. Pelekanides-M. Chatzidakis, *Kastoria*, Athens, 1984, pp. 22-65; E. Drakopoulou, "Η πόλη της Καστοριάς στην εποχή των Κομνηνών," *ΔΧΑΕ*, ser. 4, vol. 14 (1987-1988), pp. 307-314; N. K. Moutsopoulos, *Εκκλησίες της Καστοριάς: 9^{ος}-11^{ος} αιώνας*, Thessaloniki, 1992, pp. 307-392, 401-411; E. Drakopoulou, *Η πόλη της Καστοριάς τη βυζαντινή και μεταβυζαντινή εποχή (12^{ος}-16^{ος} αιώνα), ιστορία-τέχνη-επιγραφές*, Athens, 1997, pp.31-53; M. Panayotidi, "Η προσωπικότητα δύο αρχόντων της Καστοριάς και ο χαρακτήρας της πόλης στο δεύτερο μισό του 12^{ου} αιώνα," *Δώρον: τιμητικός τόμος στον καθηγητή Νίκο Νικονάνο*, Thessaloniki, 2006, pp. 157-166. 益田朋幸「アギイ・アナルギリ聖堂（カストリア）東壁面のプログラム」、『美術史研究』第41号、2003年、65-80頁。拙稿「カストリア、アギイ・アナルギリ聖堂のコスマスとダミアノス—聖人像表現と伝記サイクルについて—」、『早稲田大学文学研究科紀要』、第54号第3分冊、2008年、37-50頁。

Limniotes とその妻アンナ・ラディニ Anna Radine によって寄進された¹⁰。彼らは前代の劣化した建築を修復、フレスコで堂内を装飾し、病の治癒と魂の安寧を願って医療聖人コスマス Kosmas とダミアノス Damianos に再献堂した¹¹。アナルギリ聖堂に程近いニコラオス聖堂は、貴族ニキフォロス・カスニヅイス Nikephoros Kastnizes の寄進になる単廊式バシリカである。堂内に残る銘文は、寄進者が守護聖人ニコラオスの加護に対する感謝の意を表すため本聖堂を捧げたと記す¹²。

両聖堂の壁画が制作された 12 世紀は、前世紀から継続して、美術史上の繁栄を謳歌した時期である¹³。貴族や修道院勢力の勃興、期限付きで世俗貴族が修道院を運営することのできるシステム *Charistike* の施行は、特に私的聖堂の建築を促進した¹⁴。廃墟のまま打ち捨てられていた聖堂は修復・改築され、一方で新たな聖堂が建設された。ギリシアに現存する聖堂建築の半数近くがこの 11・12 世紀に帰属する¹⁵。アナルギリ聖堂とニコラオス聖堂も貴族の個人的な寄進によって前代の建築を修復・装飾したもので、両聖堂の献堂は同時代の動向を反映している¹⁶。

12 世紀の聖堂装飾の特色として、神学的位階に従った図像配置に加え、聖体拝領を中心とする典礼的要素の強化、キリストや諸聖人の伝記場面の増加が挙げられよう¹⁷。また、図像の種類と数だけではなく、様々な絵画様式が並存する同世紀後半は、様式史の上でも豊穡な時代である¹⁸。アナルギリ聖堂の絵画は衣襲と人体の誇張された動き、小さな頭部と引き伸ばされた人体、そして鋭角的な線の役割が顕著であり、強烈で個性的な表現を持つ。ニコラオス聖堂は人体のプロポーションや線の力強さ等の特徴を先の聖堂と共有しながら、抑制的な人体の動きや色使いに違い

¹⁰ Pelekanidis-Chatzidakis, *op. cit.*, p. 39; Panayotidi, *art. cit.*, p. 161.

¹¹ Drakopoulou, *op. cit.*, pp. 44-53.

¹² Pelekanidis-Chatzidakis, *op. cit.*, p. 50; Drakopoulou, *op. cit.*, pp. 41-44.

¹³ A. P. Kazhdan - A. W. Epstein, *Change in Byzantine Culture in the Eleventh and Twelfth Centuries*, Berkley, 1985.

¹⁴ J. P. Thomas, *Private Religious Foundations in the Byzantine Empire (Dumbarton Oaks Studies 24)*, Washington, D. C., 1987, esp. pp. 157-243.

¹⁵ C. Mango, *Byzantine Architecture*, New York, 1974, pp. 194-252; N. Gkioles, *Βυζαντινή ναοδομία*, Athens, 1987, pp. 45-175; Ch. Bouras, *Βυζαντινή και μεταβυζαντινή αρχιτεκτονική στην Ελλάδα*, Athens, 2001, pp. 83-162.

¹⁶ アナルギリ聖堂は 10 世紀の建築を 12 世紀に修復したもの、ニコラオス聖堂については建築の年代が定まっていないが、11 世紀末から 12 世紀末の間に位置づけられる。アナルギリ聖堂の建築年代は、Orlandos, *art. cit.*, p. 60 (11C); Pelekanides-Chatzidakis, *op. cit.*, p. 23 (10C)。ニコラオス聖堂の建築年代は、Moutsopoulos, *op. cit.*, pp. 406-411.

¹⁷ J. M. Spieser, "Liturgie et programmes iconographiques," *Travaux et mémoires* 11 (1991), pp. 575-590.

¹⁸ V. Djurić, "La peinture murale Byzantine XIIe et XIIIe siècles," *Actes du XV^e congrès international d'études Byzantines (Athènes-Septembre 1976)*, I, Athens, 1979, esp. pp. 167-196; D. Mouriki, "Stylistic Trends in Monumental Painting of Greece during the Eleventh and Twelfth Centuries," *DOP* 34/35 (1980-1981), esp. pp. 100-124; M. Panayotidi, "The Wall Paintings in the Church of the Virgin Kosmosoteira at Pherrai (Vira) and Stylistic Trends in 12th Century Painting," in: Ch. Bakirtzis (ed.), *Byzantine Thrace: Image and Character. First International Symposium for Thracian Studies, Komotini, May 28th-31st, 1987*, Amsterdam, 1989, pp. 457-484.

を見て取ることができる。いずれも 12 世紀後半の美術を代表する絵画である。以上の歴史的背景を踏まえて、これより両聖堂の装飾プログラムの検討に入りたい。

アナルギリ聖堂の装飾プログラム

はじめに諸聖人像の配置を概観する。内陣のコンクには聖母子像が描かれ、下部に主教像が 4 体並ぶ (図 3)。身廊の壁面には上層に預言者像が連なり、その下にキリスト伝諸場面が時計回りに配された。最下層を諸聖人の胸像・立像が飾るが、東側は主教に、西側は軍人聖者に割当てられた。聖ゲオルギオス Georgios に捧げられた北側廊には、彼の聖人伝図像や、豪華な衣装を身に纏う寄進者一家の図像 (図 4) とともに複数の主教像が壁面を埋める。対する南側廊には修道聖人がまとまって描かれ、西壁に寄進者が修道士として表された (図 5)。寄進者は北側廊と南側廊にそれぞれ、在俗と遁世の両方の姿で登場している。献堂対象である兄弟聖人の伝記場面もこの側廊の壁面上部に連なる。玄関廊には西壁に聖女像が並び、南アーチに主教像 2 体が残る。通常主教は聖堂東側に描かれるが、本聖堂では前世紀の壁画の上に同じ図像が描き重ねられた。先行研究によって、この例外的なプログラムは主教像の位置が確定していない時期の名残と指摘されている¹⁹。

献堂対象であるコスマスとダミアノスの図像は聖堂内外に複数描かれ、その存在が殊に強調された。彼らは聖堂外壁の入口両側、身廊から南側廊へ続く開口部の東壁面 (キリストにより戴冠される板絵イコン的図像)、内陣の入口両側 (内陣の聖母子に体を向けて両手をあげるアクラマティオ像)、南側廊上部の聖人伝場面に登場する (図 6)。初期の聖堂において献堂聖人は、内陣のコンクにキリスト・聖母・大天使・12 使徒・寄進者等とともに描かれるのが一般的であった²⁰。位階的な聖堂装飾プログラムの確立した中期以降、アプシスは聖母子の定位置となったため、献堂聖人は内陣以外の場所で自らの立場を表明することとなる²¹。彼らは、①堂内に複数回描かれる、②内陣周辺において、大理石や漆喰・彩色等による枠組の中に配される、③キリストや聖母を両脇に伴う、④同じジャンルの聖人が多用される等、他の聖人選択の指標となる、⑤聖人伝が表される、などの方法で、他の図像と関係を結ばない独立した図像要素として現れるようになった²²。テンプロンや内陣近くの低い壁面等、観者に近い距離に配される場合には、親密な仲介者

¹⁹ 主教像配置の歴史的展開については以下を参照。M. Chatzidakis, “Βυζαντινές τοιχογραφίες στον ‘Ωρωπο,’ ΔΧΑΕ ser. 4, vol. 1(1959-1960), pp. 87-107, esp. 92-99.

²⁰ Ch. Ihm, *Die Programme der christlichen Apsismalerei von vierten Jahrhundert bis zur Mitte des achten Jahrhundert*, Wiesbaden, 1960.

²¹ 地方の複数の聖堂に献堂聖人をアプシスに配すプログラムが残る。例えばケルキラ島アギオス・メルクリオス聖堂 (11 世紀)、マニ地方アギオス・ヨアンニス・セオロゴス聖堂 (12・13 世紀)、キテラ島アギオス・ペトロス聖堂 (12・13 世紀) など。アプシスのコンクに描かれる場合オランスのポーズをとるため、このプログラムは初期の殉教堂の名残であるとされる。

²² S. Tomeković, “Les répercussions du choix du saint patron sur le programme iconographique des églises du 12^e siècle en Macédoine et dans le Péloponnèse,” *Zograf* 12 (1981), pp. 25-42; A. S. Koukiaris, “Οι θέση του επώνυμου αγίου στο εικονογραφικό πρόγραμμα του βυζαντινού ναού (γενικές αρχές),” *Κληρονομιά* 22

としての役割が殊に強調される²³。アナルギリ聖堂でも、中期以降の図像配置の枠組に従い、献堂聖人の図像を幾度か重要な壁面に配す。また身廊西側の聖戦士や医療聖人の図像は2名1組の組み合わせで配置されており、双子の聖人に捧げられた本聖堂の特色に適応しつつ、装飾プログラムにおいて左右対称のバランスを生み出している。

本聖堂で興味深いのは、第一に、テサロニキに関係の深い複数の聖人が聖堂北側に集められた点である(図7)。まず南西隅の細長い壁面に描かれた隠修士ダヴィド David から見ていこう²⁴。白髪白髯のダヴィドには、立像と樹木の頂に胸像を配す2種類の図像タイプがあるが²⁵、アナルギリ聖堂では前者を選ぶ。ギリシアにある11~12世紀の壁画を持つ80余りの聖堂を調査したところ、ダヴィド像を描くのは本聖堂のみで、従って特別な配慮が見て取れるだろう。さらに、玄関廊西壁の北隅、すなわち北側廊入口の向かい側に聖女テオドラ Theodora の図像が配置されている²⁶。後述するが、彼女は他の聖女とは異なる基準を以て選択されており、それは彼女の出自がテサロニキであることに関係するものと考えられる。身廊北壁にはテサロニキの守護聖人ディミトリオス Demetrios が描かれた。ディミトリオス像のある身廊北壁の裏側、すなわち北側廊の南壁には寄進者一家が描かれている。以上の聖人選択と図像配置は、テサロニキと寄進者との関係を示すものだろうか。カストリア土着の貴族である寄進者と首都の高級官僚の家系に連なるその妻がテサロニキにどのように関わるのか、現時点での言明は難しい。銘文からも明らかではなく、文書史料も残らない。ここでは一都市の聖人の図像が聖堂の一部に集中して配置された点を指摘するに留めざるを得ないが、聖人と地方との関係について付言しておきたい。

聖人崇敬はもともと、地方的な色合いの濃いものであった。殉教者の墓参りに端を発する聖人信仰は、当初は、移動のきかない墓という地理的制約を受けながら各地方で生成・発展したものである。後に聖遺物移動が行われ、聖人の遺骸や所有物は広範囲に拡散することになるが、聖人に対する信仰は特に殉教の地を中心とするものであった。中期以降も地方特有の聖人は当該地域において重要視され、ポピュラーな聖人の図像群に挿入される形で当地の聖堂壁画に登場する。例えばマリキは、キプロス島の聖堂調査から、同島の聖堂装飾プログラムが11世紀以降特に発展する地方の主教たちへの崇敬に特色づけられると述べた²⁷。地方の聖人がより頻繁に聖堂に描か

(1990), pp. 105-123; S. Kalopissi-Verti, "The Proskynetaria of the Templon and Narthex: Form, Imagery, Spatial Connections and Reception," in: Sh. E. J. Gerstel (ed.), *Thresholds of the Sacred: Architectural, Art Historical, Liturgical and Theological Perspectives on Religious Screens, East and West*, Washington, D.C., 2006, pp. 107-132.

²³ Koukiaris, art. cit., pp. 105, 120; Kalopissi-Verti, art. cit., pp. 118, 120.

²⁴ Delehayé, *op. cit.*, cols. 771-772; R.-J. Loenertz, "Saint David de Thessalonique. Sa vie, son culte, ses reliques, ses images," *Revue d'études byzantines* 11 (1953), pp. 205-223.

²⁵ Loenertz, art. cit., pp. 219-220.

²⁶ A. M. Talbot (transl.), "Theodora of Thessaloniki," in: *Holy Women of Byzantium: Ten Saints' Lives in English Translation*, Washington, D.C., 1996, pp. 159-237. テオドラはアナルギリ聖堂の他、テサロニキのアギア・ソフィア聖堂西側のアーチ(11世紀)に描かれる。

²⁷ D. Mouriki, "The Cult of Cypriot Saints in Medieval Cyprus as Attested by Church Decorations and Icon

れるのはビザンティン後期（13世紀半ば～15世紀半ば）なので、キプロスは地方的なプログラムの最初期の例といえよう²⁸。ギリシア本土の例では、ペロポネソス半島で崇敬を集めた悔悛者ニコン Nikon が、同半島南部マニ地方アギア・キリアキ聖堂（11世紀）、同半島中央部ヴルヴラ近郊の洞窟礼拝堂（12世紀前半）、オシオス・ルカス修道院主聖堂（11世紀）等に描かれた²⁹。島嶼部ではクレタ島の主教ミロン Myron やティトス Titos、ケルキラ島の主教アルセニオス Arsenios の像が、当地と近隣の島々の聖堂内にポピュラーな聖人とともに表されている。地方の聖人に対する信仰がどの程度まで限定的であったのか定かではないが、複数の作例を見る限り、当該地域から比較的広い範囲に浸透していたようである。アナルギリ聖堂におけるテサロニキの聖人の位置づけも、地方的な崇敬を反映したものとも考えられるだろう。

次に、11・12世紀に普及した典礼暦と聖堂装飾との関係を観察したい。メノロギオンやシナクサリオンなどの写本挿絵において、聖人像は、該当する祭日の脇や各月の始めの頁などに描かれた。彼らが複雑な聖堂の壁面に表される場合、どのような形をとるのだろうか。ナノ・ハジダキは、オシオス・ルカス修道院主聖堂の南北付属礼拝堂フレスコ壁画（11世紀）研究において、キリスト伝図像の祭日に近い日に祀られる聖人が周囲に描かれたと指摘する³⁰。またムリキはキオス島ネア・モニ修道院主聖堂の外玄関廊モザイク（11世紀）やパトモス島アギオス・ヨアンニス・テオロゴス修道院礼拝堂のフレスコ壁画（12世紀後半）に関する論考で、描かれた大半の聖人が典礼暦の年の前半、特に10月から1月に祭日を持つことを指摘した³¹。この集中的な聖人の選択は、シメオンのメノロギオン全10巻のうち初めの6巻までが9月から12月に配当される不均衡に関連づけられる³²。

アナルギリ聖堂の聖人像と典礼暦の関係を確認すると、身廊と玄関廊において暦に基づく対照的な聖人像配置が行われていることがわかる³³。身廊の東西で年の前半と後半の聖人が対置されており、同様の配置は玄関廊西壁の南北にも観察される。まず身廊から見ていこう（図8）。内陣下部にグリゴリオス・テオロゴス Gregorios Theologos（1月25日）、バシリオス Basileios（1月1日）、ヨアンニス・クリソストモス Ioannes Chrysostomos（11月13日、1月27日）、ニコラオ

Painting," in: A. A. M. Bryer-G. S. Georghallides, *The Sweet Land of Cyprus*, Nicosia, 1993, esp. pp. 238-245, 255-256.

²⁸ 後期の作例については以下を参照。Ch. Walter, "Portraits of Local Bishops: a Note on Their Significance," *Zbornik radova Vizantoloskog instituta* 21 (1982) (rep. in: *Prayer and Power in Byzantine and Papal Imagery*, London, 1993, II), pp. 16-17; Ch. Konstantinidi, "Le message idéologique des évêques locaux officiants," *Zograf* 25 (1996), esp. pp. 46, 50.

²⁹ 悔悛者ニコン像を持つ聖堂は以下の文献にまとめられている。N. B. Drandakis, "Ευκονογραφία του Οσίου Νίκωνος," *Πελοποννησιακά* 5 (1962), pp. 306-319.

³⁰ Th. Chatzidakis-Bacharas, *Les peintures murales de Hosios Loukas: les chapelles occidentales*, Athens, 1982, pp. 105-109.

³¹ D. Mouriki, *The Mosaics of Nea Moni on Chios*, I, II, Athens, 1985, pp. 208-212; Eadem, art. cit., p. 224.

³² Mouriki, *op. cit.*, p. 211.

³³ 典礼暦は以下を参照した。H. Delehaye, *Synaxarium ecclesiae constantinopolitanae*, Brussels, 1902; J. Mateos, *Le typicon de la grande église*, 2 vols., Rome, 1962-1963; Ševčenko, *op. cit.*

ス Nikolaos (12月6日)³⁴、神域近くの身廊南壁面に3名の主教イエロテオス Ierotheos (10月4日)、グリゴリオス・ネオス Gregorios Neos(祭日不明)、ヨアンニス・エレイモン Ioannes Eleemon (11月11日)、北側廊に続く東開口部のアーチに4名の主教、グリゴリオス・サヴマトウルゴス Gregorios Thaumaturgos (11月17日)、エレフテリオス Eleutherios (12月15日)、ローマ教皇レオン Leon papas Romes (11月12日、2月27日)、アヒリオス Achillios (5月15日)の立像が描かれる。一方、身廊西側には、南壁にテオドロス・ストラティラティス Theodoros Stratelates (2月6日と6月8日)とテオドロス・ティロン Theodoros Teron (2月17日)の立像、西壁にペアの医療聖人キロス Kyros とヨアンニス Ioannes (1月31日・聖遺物移動6月28日)の胸像、その下に兵士クリストフォロス Christophoros (5月9日)とプロコピオス Prokopios (7月8日)の立像、北側廊に続く開口部のアーチに双子の殉教者ラヴロス Lauros とフロロス Phrollos (8月18日)の胸像が表された。身廊西壁に描かれるキリスト伝場面もまた、聖人と同様に年の後半に祭日を持つ。西壁上部に「ラザロの蘇生(受難週前の土曜日)」と「聖母の眠り(8月15日)」の2場面が描かれ、そのすぐ下に上述のキロスとヨアンニス、クリストフォロスとプロコピオスが配された。受難伝を聖堂西側に配するのは中期以降の聖堂で一般的に見られるが、アナルギリ聖堂でもキリストの事績の祭日に合わせて聖人が選択されている。

玄関廊西壁では、南側に母子の聖人イェルサレム Ierousalem・セケンドス Sekendos・セケンディコス Sekendikos (祭日不明)、エウフィミア Euphemia (9月16日)、テクラ Thekla (9月24日)、アナスタシア Anastasia (10月12日)、玄関口を挟んで北側にキリアキ Kyriake (7月7日)、母子ユリッタ Ioulitta とケリコス Kerykos (7月15日)、マリナ Marina (7月17日)³⁵、テオドラ (4月5日)の像が配された。西壁の南北において、聖女像の配置はビザンティン暦の年の初め(9月)と終わりで明確に対比されている(図9)。西壁北側の聖女たちが7月に祀られる一方、テオドラの祭日のみ4月なのは、前述のようにテサロニキの聖人であることが理由と考えられよう。エルサレムと2人の息子セケンドスとセケンディコスの3名は本聖堂以外では見られず、首都の典礼暦にも採録されない稀な聖人である。推測の域を出ないが、献堂聖人であるコスマスとダミアノス、母テオドティ Theodote の家族構成になぞらえ、選択されたものと考えられる。

アナルギリ聖堂の検討から、諸聖人像について以下の特色が導かれよう。①献堂対象の聖人の属性に合わせて、他の聖人が選択される。双子の聖人に捧げられた本聖堂では、献堂聖人に倣って2名1組の左右対称的な図像配置が行われた。また玄関廊に母と2人の息子という同じ家族構成を持つ稀な聖人グループが採用される。②特定の聖人の選択と配置が、寄進者との特別な結び

³⁴ ただし彼らは通常アプシスに描かれる主教たちで、アナルギリ聖堂の特殊な選択ではない。

³⁵ アナルギリ聖堂のマリナは他の聖人像のように正面立像ではなく、悪魔ベルゼブルに槌を振りかざす姿で描かれる。この表現は14世紀以降普及するが、ケルキラ島アギオス・メルクリオス聖堂(1074/75年)やクルビノヴォ(マケドニア)のスヴェティ・ジョルジェ聖堂(1191年)が初期の例として挙げられる。後者の聖堂はアナルギリ聖堂と同じ画家による壁画とされている。

つきを示しうる。本聖堂ではテサロニキの聖人が聖堂北側に集中して描かれていた。地方的なものか、寄進者の私的な信仰による可能性がある。③典礼曆に基づいて聖人の選択と配置が行われた。本聖堂では身廊の東西・玄関廊西壁の南北において、祭日に基づく対照的な諸聖人像の配置が実現されている。当時の規範であった階層的な図像配置の規範に加え、多様な要素を含めてひとつの聖堂の装飾プログラムが組まれたとするならば、神学的知識のみならず、諸聖人に対する多大な崇敬と深い宗教的な関心が、大前提となるだろう。

ニコラオス聖堂の聖人像プログラム

単廊式のニコラオス聖堂は、内陣にやや広めのアプシスを持つ。本聖堂もアナルギリ聖堂同様、位階的な聖人選択と配置が行われた。身廊東部分は壁画の保存状態が良くないが、アプシスに主教像が並び、内陣両側の壁龕に輔祭が描かれた跡が残る。身廊の南北壁面は3層に区分され、上層にキリスト伝諸場面、中層に聖人の胸像、下層に聖人の立像が配された。下2層の聖人には、東側に主教、西側に聖戦士と殉教聖人が選ばれている。身廊西壁も大きく3層に分かれ、中・上層にキリスト伝3場面、下層に医療聖人の立像が並ぶ。玄関廊の東壁に1名の殉教聖人、南北壁に聖女像が置かれる。玄関廊西壁の壁画が現存しないためオリジナルの状態は不明だが、ニコラオス聖堂には修道士や隠修士の像が見られない。

献堂対象である聖人ニコラオスは、アナルギリ聖堂と同様、複数回目立つ壁面に表され、聖人伝も描かれた。先の聖堂と異なるのは、献堂聖人が1名であるため、左右対称的な図像配置が不可能だった点だろう。ニコラオス聖堂では、キリストとマリアを伴う彼の立像が身廊南壁やや東寄りであり、北壁のキリスト像に対置される(図10)。両像とも浅く後退した縦長の半円形壁面を占め、他の図像とは明確に区別されている。また、玄関廊から身廊へ続く扉口上部にニコラオスの胸像が置かれた。ここは一般に、キリストや聖母の胸像が描かれる重要な壁面である。キリストと同等の大きな壁面や通常キリスト像が占める場所にニコラオスが表されたのは、献堂聖人としての地位を表明するためだろう。三廊式のアナルギリ聖堂で南側廊に配された献堂聖人の伝記場面は、単廊式のニコラオス聖堂では玄関廊に見られる。異なる建築構造は聖人伝場面の配置の違いを生むが、いずれも副次的な空間に描かれた点が共通する。ニコラオス聖堂ではさらに、外壁東部分のレンガ装飾に献堂聖人と寄進者の頭文字であるNが施されている³⁶。

本聖堂の壁面を飾る聖人の大半は他の聖堂にも登場する頻度の高い者だが、総計44名の聖人のうち3名、すなわち身廊北壁東隅の主教ハラランボスCharalambos、玄関廊南壁の聖女フォティニPhteine、玄関廊東壁の殉教者エルピディオスElpidiosは描かれることが稀な聖人である。コンスタンティノポリスのシナクサリオンには同名異人のハラランボスとエルピディオスの名前が複数記録されるが、手掛りの乏しさゆえ同定は難しい。玄関廊唯一の男性殉教聖人エルピディオスの図像は、聖母子像と献堂聖人像の間、寄進者像と銘文の真下という重要な位置を占めている。

³⁶ Pelekanidis-Chatzidakis, *op. cit.*, p. 56.

ハジダキスは、このエルピディオスを皇帝ユリアノスの宮廷に使えた官吏とするが、同定の根拠や配置の理由については触れない³⁷。アナルギリ聖堂ではテサロニキの聖人が特殊な図像配置を形成したが、エルピディオスの場合、特定地域の聖人であることが格別な待遇の事由とはならない。献堂聖人ニコラオスとの関係も皆無である。一般的でない聖人を選択し重要な壁面に配すには寄進者の個人的な意向があるだろうが、その理由については献堂銘文等からも窺うことができない。

アナルギリ聖堂では身廊の東西・玄関廊の南北において諸聖人の祭日に基づく対照的な図像配置が観察された。ネア・モニ、ダフニ両修道院主聖堂、パトモス島アギオス・ヨアンニス・テオロゴス修道院付属礼拝堂では、聖者暦のなかから特に10月から1月の聖人が描かれる。ニコラオス聖堂では年間の祭日からバランスよく聖人が採用されており、全体的な図像配置も暦に基づくものとは言い難い。身廊西壁のみ、アナルギリ聖堂と同じく年の後半に祭日を持つ聖人の図像が配されている。ここには3組6名の医療聖人像が並ぶ(図11)。師弟のキロスとヨアンニス(1月31日、聖遺物移動6月28日)がエルモラオスErmolaos(7月26日)の、双子のコスマスとダミアノス(アジアの兄弟聖人の場合:11月1日、ローマの場合:7月1日)がパンテレイモンPanteleemon(7月27日)の両側に立つ。エルモラオスとパンテレイモンは師弟関係にあり、アナルギリ聖堂でも身廊南アーチにともに表されている。6名の上部には「昇天(復活祭後40日目)」「変容(8月6日)」「聖母の眠り(8月15日)」という、死と救済にまつわる場面が並び、聖人を含め、西壁全体をキリストの受難と復活を記念する年の後半に奉じたものと見られる。西壁の処理は、アナルギリ聖堂に類似する。

ニコラオス聖堂も、中期以降の位階的なプログラムに従った図像配置を持つ。聖人像は各自の地位に応じて堂内の壁面に配された。単純な壁面を構成する単廊式の聖堂において、ニコラオスは像の大きさと配置によって献堂聖人であることが強調されている。特定の聖人と聖堂、あるいは聖堂寄進者との関係はここでも観察された。本聖堂以外に見られない殉教聖人エルピディオスは、寄進者と献堂聖人のそばに描かれるが、彼の重要な位置づけを説明する理由は明らかではない。典礼暦に基づく聖人の選択と配置は、ニコラオス聖堂では西壁において行われた。

結び

本稿では、カストリアにあるふたつの聖堂を対象として、献堂聖人像の処理、特定の聖人の変則的な選択と配置、そして典礼暦と聖人像の関係を中心に考察を行った。両聖堂のプログラムは、大枠では同時代の位階的な装飾プログラムの規範に従いながら、細かな点で多様さを呈する。描かれることの稀な聖人や地方的な崇敬を受ける聖人も、広く信仰される聖人たちとともに聖堂内に登場し、時に重要な壁面を占めた。10世紀に整備されたシメオンのメノロギオンをきっかけとして、より多くの聖人が信徒に身近な存在となり、その近しさゆえに聖堂内で格別の待遇が可能

³⁷ *Ibid.*, p. 57.

となった。聖人崇敬は極めて個人的な側面を持つ。個人寄進の聖堂建築では、私的な嗜好による聖人選択がより自由なものとなった。聖人に関する知識の拡大、聖人像を擁する挿絵入り写本の増加なども、どの聖人を描くかの選択肢を広げるのに寄与した。

典礼暦に基づく配置は、同時期の他の聖堂と同様、カストリアの聖堂においても認められる。特にアナルギリ聖堂は、祭日という基準が強く反映された図像配置を見せている。両聖堂とも身廊西壁において、近い時期に祭日を持つキリストの事績と聖人を同じ壁面に配す。聖人は、描かれる場所だけではなくその祭日においても、キリストが起こした奇跡に寄添い、事績を証す者として立つ。聖なる証人は、同時に、信徒を奇跡の場面へと橋渡しをする結び目としての役割を演じている。

諸聖人像は聖堂装飾における不可欠な図像要素だったが、はたして信徒にどのように眺められたのだろうか。デムスは次のように記す。

観者は、自分自身が聖なる事績に立会い、聖なる人々と言葉を交わすという感覚を持つ。彼は、聖人たちから切り離されているのではない。肉体を以て、聖堂の大いなるアイコンに取り込まれているのである。群れなす聖人に囲まれ、彼の目撃する事績に参加しているのである³⁸。

聖堂に入ることはすなわち、奇跡や諸聖人の集まりを目撃し、体験することだった。その際、常に身近に思う守護聖人や地方的な聖人のそばにありたいと願い、聖堂にその姿を描くのは、信徒にとって自然な行為だっただろう。また、聖人像の選択と配置に複数の基準を用いるには、聖人伝に通暁したプログラムの指揮者の存在が不可欠だった。最下層の壁面という配置場所、プログラムにおける独自性と柔軟性、像の担う意味の重層性、地域的・私的な聖人との関係など、聖人像にまつわる以上の特色はすべて、ビザンティンの人々の聖人に対する親密さを示している。

³⁸ Demus, *op. cit.*, p. 13.



図1 <シメオンの殉教>『バシリオス2世のメノロギオン』46頁、10世紀末か11世紀初頭、ローマ、ヴァチカン図書館



図2 <6~8月のイコン>、11世紀、シナイ山、アギア・エカテリニ修道院



図3 アギイ・アナルギリ聖堂身廊東側



図4 寄進者テオドロス・リムニオティス
(画面向って左)、アギイ・アナルギリ聖堂
北側廊南壁



図5 寄進者テオドロシオス
(テオドロス・リムニオティス)、
アギイ・アナルギリ聖堂南側廊西壁

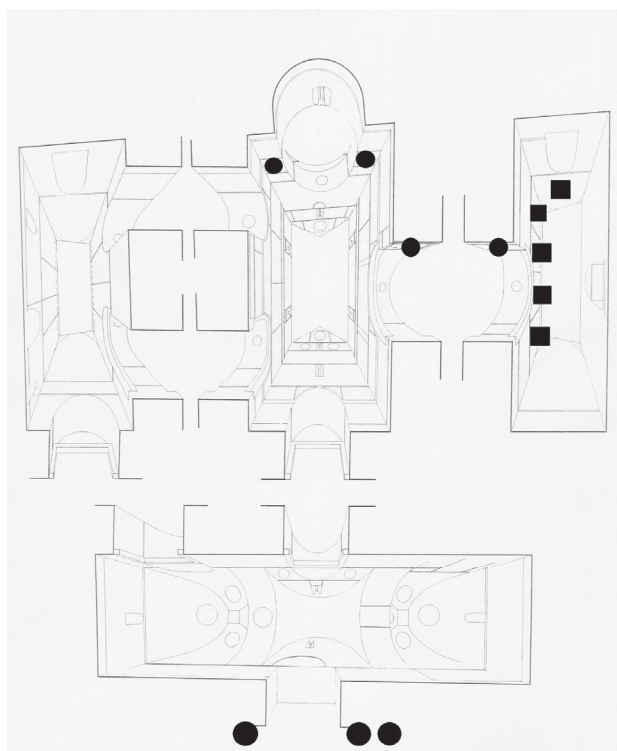


図6 アギイ・アナルギリ聖堂平面図

- ：コスマスとダミアノス像
- ：コスマスとダミアノス伝図像

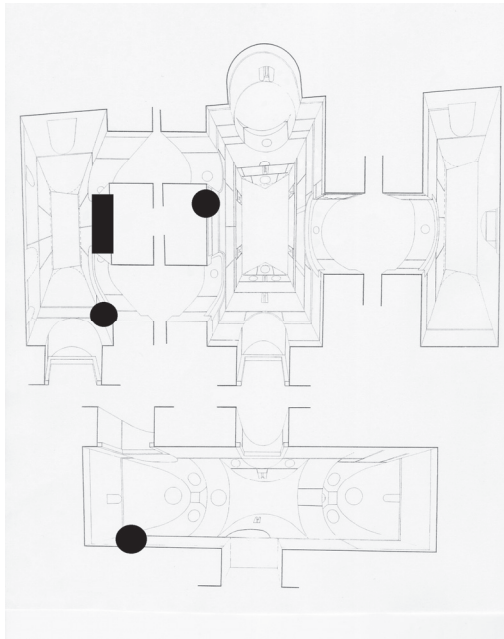


図7 アギイ・アナルギリ聖堂平面図

- ：テサロニキの聖人
- ：寄進者像

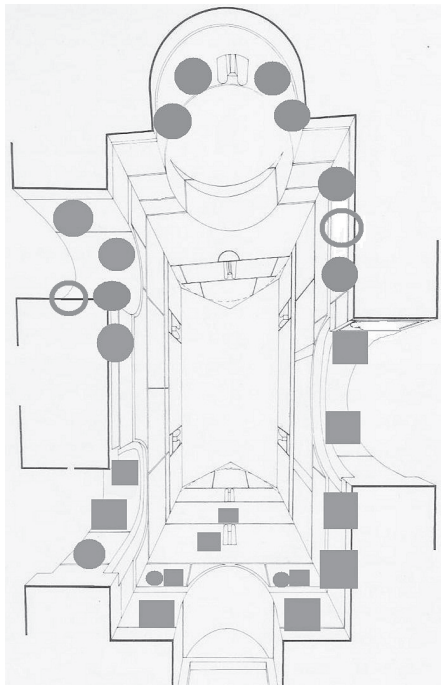


図8 アギイ・アナルギリ聖堂身廊平面図

- ：9～1月の聖人、■：2～8月の聖人
- ：祭日不明

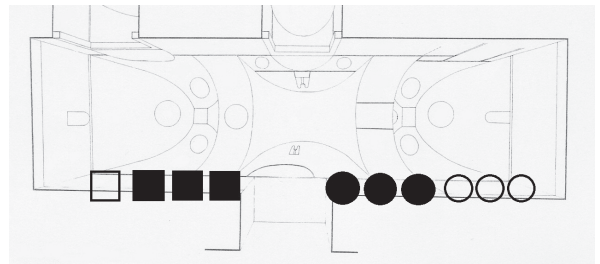


図9 アギイ・アナルギリ聖堂玄関廊平面図

- ：9、10月の聖人
- ：7月の聖人
- ：聖人一家（母と2人の息子：セケンドス、イェルサレム、セケンディコス）
- ：テオドラ（祭日4月、テサロニキの聖人）



図10 聖ニコラオス、アギオス・ニコラオス・トゥ・カスニヅィ聖堂身廊南壁

昇天 (復活祭後40日目)						
変容 (8/6)			聖母の眠り (8/15)			
Kos	P	D		Kyr	E	I
7/1 or 11/1	7/27	7/1 or 11/1		1/31 and 6/28	7/26	1/31 and 6/28

図11 アギオス・ニコラオス・トゥ・カスニヅィ聖堂身廊西壁図